

「赤松小三郎—議会政治の先唱者」小林利通 (『維新の信州人』より) から読み取る  
～赤松小三郎がどのように評価されてきたか～

88 期 白井亜希

明治 29 年 赤松小三郎 30 年祭、赤松家再興 — 地元の人々からの冷遇無視

↓

**明治 35 年 信毎 山路愛山による連載「上田の奇傑 赤松小三郎」1 月 10 日～16 日**

— 取材元は『續再夢記事』、飯島花月氏の所蔵するものによる (兄柔太郎宛の書簡はこれに含むのか?)

[坂本龍馬が政権奉還、侯伯会議を建議したるものに先づを数月也]

— 征長を継続することは幕府にとって得策ではないと上書したのではないか。

[彼れは時勢の急転するを見て蘭学より英学に転じたり]

— 暗殺されたのは、その聡明さ・先見さによってではないかと推論している。

— 上田藩に於いて赤松について鬚を切った森田斐雄 (あやお、のちに長野県議会議長) ですら、彼を狂人とののしっている。

☆ 小三郎の存在を最初に世に訴えたものと小林氏は述べる。

↓

明治 39 年 東郷平八郎・上村彦之丞 上田を訪問 — 県内でも注目されるように

↓

**大正 6 年 (1917) 『赤松小三郎先生』 藤沢直枝 信濃教育会小県部会**

— 幕府への口上書の文が掲載されている

— 当時の公武合体論や尊王倒幕にくらべれば、[穩健にして巧妙なる] 方策

**大正 11 年 (1922) 『信濃人物志』 佐藤寅太郎編 文正社**

[赤松正道傳及口碑] の表記があるが、取材元のことか。

↓

大正 13 年 従五位を贈られる — 〈兵学者〉〈西洋学者〉としての意義を認められる

↓

**大正 14 年 (1925) 『維新前後に於ける立憲思想』 尾佐竹猛 — 思想史的な位置づけ**

— 「議政局を立て上下二局に分ち其下局は～」の部分に傍点がふられている。

— 「象山の書簡に赤松氷谷とあるのは小三郎？」の注書あり。

↓

大正 15 年 月窓寺の墓 長野県史蹟に指定

↓

昭和 9 年 上田中学において遺物展覧会

↓

**昭和 14 年 『赤松小三郎先生』 柴崎新一 信濃毎日新聞社**

—実際の日記・書簡・著書などの原資料にあたった画期的な書

**昭和 14 年『近世日本国民史』明治維新と江戸幕府(二) 徳富蘇峰**

**第八章 公議政体論起こる 二 赤松小三郎の政体改革意見書(一)～(三)**

[～いわゆる当時の新知識においては、必ずしも珍しくなかった～赤松の新見でなく、翻訳思想であった～いかにも議院政治謳歌の先駆を倣したるもの～明治初期より中期にかけての一大理想となった][少なくとも当時識者の意見は、これによりて代表せられたりというも、決して過言ではない][開国論者としては錚々たる一人であった]

↓

太平洋戦争期には顧みられなくなる

↓

昭和 17 年 京都信濃会 小三郎七十五年忌法要 遭難の地に記念碑 —陸海軍創設の士として

↓

信州自由民権運動の前史に位置づけられ、代議政体論の先駆者として思想的に再評価しようとする動き

↓

**昭和 39 年『信州教育史の研究』上沼八郎 信濃教育会**

[むしろ自藩を脱して、全国的視野から近代国家の編成を望む兵学者の眼を自ら育てつつあった]

↓

昭和 42 年 「桐野利秋の日記見つかる」(南日本新聞)

↓

**昭和 43 年「信濃教育は何を残したか」久保田正文 展望 6 月号**

—山路愛山が日本で最初の議会政治思想を発表したものとして紹介していることを挙げている

**1971『天皇の世紀』7 大仏次郎 朝日新聞社—ただの西洋かぶれ**

[外国書の翻訳調だった上に、西洋崇拝の臭味があつて～攘夷論者に聞かせたら、到底無事では済まぬような論旨を示した。その故か、越前公の手に渡っても日の目を見るには到らなかった]

**昭和 47 年(1972)『近代を築いたひとびと』1 坂本令太郎 信濃路**

[わが国にはじめて議会政治の構想を紹介した偉材]

**「信州自由民権の指導者たち」小池浩 産業経済調査月報**

**1972「人物断想—赤松小三郎をめぐって」原田伴彦 歴史と文学 第 2 号**

—柴崎氏の『赤松小三郎先生』を資料として丹念に書かれている。

—上田藩は小三郎の意見書をほとんど取り上げなかった・小三郎の京都行はいわば脱藩行為でもあった・幕府への献言が後の禍を招くことにつながった・戦中、戦

後においても注目されることはなかった

**1973 『佐久自由民権運動史』 上原邦一 三一書房**

[赤松の思想見識は、この土地に根をおろさず、彼の代議政治論も、地元には衣鉢を継ぐ者もなかった]

**昭和 53 年 『郷土歴史人物事典 長野』 古川貞雄編著 第一法規**

[洋式兵学者、議会政治の先唱者、坂本竜馬の公議政体論に先だつこと半年、近代政治思想史上彼の名を不滅にするものであった]

**1989 『近代日本思想体系』 9 憲法構想 加藤周一ほか編 岩波書店**

[公武合体論に立ち、内閣制、上下二局（二院制）を建議している～かなり具体的で、上局下局両議員の選出に公平な選挙を主張したところに革新性が見られる]

《出典の該当部分》

「上田の奇傑 赤松小三郎」 山路生 信濃毎日新聞 1902. 1. 10-16 (全 6 回)

『赤松小三郎先生』 藤沢直枝 信濃教育会小県部会 1917

『信濃人物志』 佐藤寅太郎編 文正社 1922 P. 456-458

『尾佐竹猛著作集』9 (政権史 3) 明治大学史資料センター監修 ゆまに書房 2006 P. 165-168

『近世日本国民史』 明治維新と江戸幕府 (二) 徳富蘇峰 講談社学術文庫 1979 P. 150-159

『信州教育史の研究』 上沼八郎 信濃教育会 1964 P. 66-67

「信濃教育は何を残したか」 久保田正文 展望 6月号 1968 P. 225-239

『天皇の世紀』 7 大仏次郎 朝日新聞社 1971 P. 261-262

『近代を築いたひとびと』 1 坂本令太郎 信濃路 1972 P. 7-16

「人物断想—赤松小三郎をめぐる—」 原田伴彦 歴史と文学 第 2 号 1972 P. 158-164

『佐久自由民権運動史』 上原邦一 三一書房 1973 P. 9-11

「赤松小三郎—議会政治の先唱者」 小林利通 『維新の信州人』 1974 P. 5-49

『郷土歴史人物事典 長野』 古川貞雄編著 第一法規 1978 P. 73-74

『近代日本思想体系』 9 (憲法構想) 加藤周一ほか編 岩波書店 1989 P. 28-32

その他紹介されている文献

『徳川慶喜公伝』 第四巻～公議政体論の由来～ [欧州思想の模倣とのみは言う能わざるなり]

『大垣市史』 (可児春琳談)

『続再夢記事』

『鹿児島県史』

《維新史料編纂会の小三郎暗殺関係》

- ・ 旧鹿児島藩士有馬純雄 (藤太) 談・ 旧鹿児島藩士新納立夫日記・ 熊本藩士青池源右衛門探索書・ 鳥取藩庁記録、編年雑録・ 中川宮朝彦親王日記・ 品川弥二郎日記
- ・ 上田藩士子弟の談

『松平忠固・赤松小三郎』小林利通 上田市立博物館発行

・松平忠固の遺訓「交易は世界の通道なり・・」(18ページ)

・「後年、『あんなに簡単に幕府が倒れるなら、赤松を殺すのではなかった』という山県有朋と桐野利秋の会話が伝えられている」(27ページ)

《上記2点の出典について》

---

徳富蘇峰『近世日本国民史』明治維新と江戸幕府(二) 講談社学術文庫

第八章 一 薩長交渉の概略 より

～慶応三年～薩摩藩士中村半次郎・伊集院金次郎は、長藩士山縣狂介・鳥尾小彌太を伴い入京～

栗原智久『桐野利秋日記』PHP 研究所 2004 より

～慶応3年4月25日 下関に入り、山県有朋・鳥尾小彌太の紹介を受ける～5月2日 山県らを同伴して下関を出発、10日に伏見より京都薩摩藩邸に入る～

～(明治元年)9月10日に山県率いる越後口官軍が若松城下に入り、この日、新政府軍は総攻撃に出ている～

その後、9月20日に会津藩降伏するまでの間に、そのような会話がなされたかもしれない。

半藤一利『山県有朋』ちくま文庫 2009 より

～九月二十二日、会津藩降伏～越後口の官軍をして、その日のうちに皆な城下を引揚げしめたり～

とあるので、そんな暇もなかったかもしれない。

高野澄「桐野利秋とその時代」(『桐野利秋のすべて』新人物往来社 より)

～慶応三年十二月に王政復古が宣言され～西宮に待機していた長州軍は陸続として入京していったが、奇兵隊総督山県有朋のかたわらに寄り添う中村半次郎利秋の姿があったという説がある～

この一文を見ると、この時に発せられた会話のようにも思える。

《参照・参考文献》

『近世日本国民史』明治維新と江戸幕府(二) 徳富蘇峰 講談社学術文庫 1979 P. 148-149

『桐野利秋日記』栗原智久 PHP 研究所 2004 P. 230, 163

『桐野利秋のすべて』新人物往来社 1996 P. 28

『山県有朋』半藤一利 ちくま文庫 2009 P. 68

『幕末維新史料叢書』5 懐旧記事 山県有朋 新人物往来社 1969

『公爵山県有朋伝』上巻 徳富蘇峰 原書房 1969

『史伝 桐野利秋』栗原智久 学研 M 文庫 2002